

第2章 基本理念・教育目標

1 基本理念

未来を^{ひら}拓く・創る・生きる

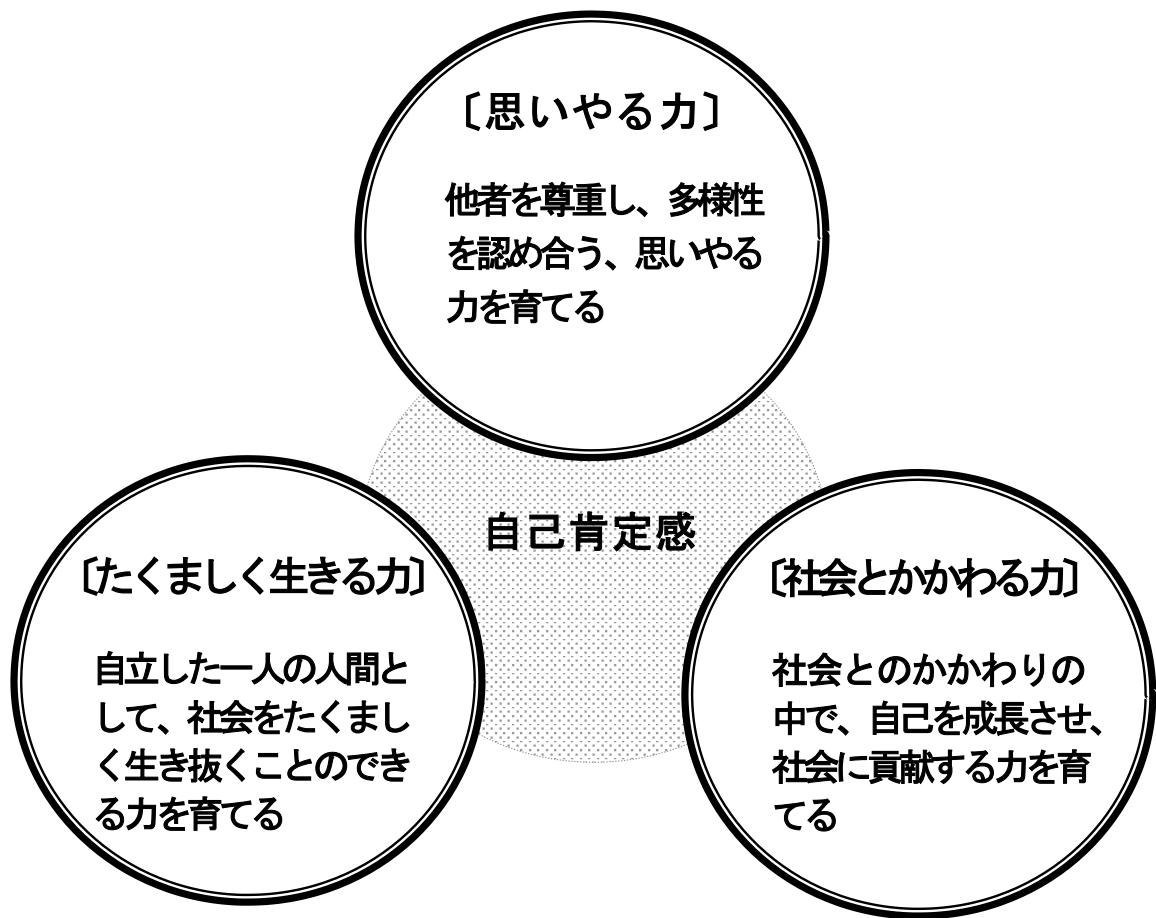
人間力あふれる

かながわの人づくり

- 子どもたちは、よりよい未来を築く、大きな可能性を秘めた存在です。激しい変化が予想されるこれからの時代にあっても、子ども一人ひとりが、その資質や能力を十分に発揮して生きることができるよう、しっかりとほぐされなければなりません。
- なかでも、夢や希望に向かい、自らを律して困難を乗り越え、**未来**をたくましく切り^{ひら}拓くことや、自己と社会の未来を**創る**強い意志をもち、変化をおそれず主体的に行動すること、さらに、自己への自信と人への思いやりをもって、心豊かでしなやかに**生きる**ことのできる力を備えることが重要です。
- そのためには、まわりの人から「大切にされている」と感じながら、育てられることが必要です。そこから生まれる安心感や信頼感に根ざして、自らをありのままの姿で受容できる自己肯定感をほぐくんでおかなければなりません。
- また、教育にかかわるすべての人々には、個のニーズに応じた多様な支援を充実していくことが求められています。
- このような考え方をもとに、自立した一人の人間をめざす自分づくりと、社会の構成員としてよりよい社会づくりにかかわる総合的な力を**人間力***ととらえ、**かながわの人づくり**の視点として基本理念をまとめました。

2 教育目標（めざすべき人間力像）

かながわの教育がめざす「人づくり」の基本理念を実現するために、子どもから大人まで、すべての人が身に付けていきたい「人間力」の内容を、まわりの人との関係、社会との関係、自己の成長の姿という視点から「めざすべき人間力像」に整理を行い、教育目標として掲げました。



この3つの教育目標では、人が家庭の中に生まれ、多くの人に見守られながら成長していく過程で、自己肯定感を基盤とし、人を尊重し、多様性を認める思いやる力を身に付けるとともに、社会とのかかわりの中で豊かな経験を積み、学び続けることで人間的な成長を遂げ、自分らしく自立してたくましく生き抜くことのできる力と、学んだことを生かして社会に貢献する力の育成をめざしています。

3 かながわらしい教育に向けて

(1) 「ふれあい教育」の成果と課題

本県では、昭和50年代の過熱する受験競争や、知識偏重的な教科中心の学校教育のあり方などをめぐり、県民をあげての「騒然たる教育論議」をきっかけとして、人や自然とのふれあいによる体験的な活動を重視した「ふれあい教育」が生まれ、現在まで、かながわの教育の根幹をなしてきました。

「ふれあい教育」は、家庭や学校、地域などの様々な団体が参加して、運動の意義や役割を共有し、行政機関も共通認識のもとで一体化した取組みを推進するものであり、「ふれあい」という言葉が、学校だけでなく、家庭や地域でも使われるようになっていきました。かながわの教育における歩みの中で、その取組みは、一時代を象徴するものといえます。

また、この「ふれあい教育」は、様々な体験活動を通じて、子どもたちが人と人とのつながりや、自然とのふれあいの大切さに気づくことや、学ぶ者と教える者とが、世代や立場を超えて学び合うという考え方が浸透していくことに、大きな成果をあげてきました。

その一方で、家庭や学校、地域などにおいて、広く展開されていたものが、時間の経過とともに、次第に学校教育が中心的な場となっていきました。さらに、子どもたちの社会性などを着実に育成していくような、成長に応じた学習活動のつながりには課題が残りました。

さらに、現在、不登校やいじめなどの件数は減らず、人格や生命の尊厳を傷つける程までに深刻化しているものもあることは、真摯に受け止めなければならない課題です。



(2) 今こそ大事な心ふれあう経験

人は、元来、自分以外の存在と「ふれあう」ことを通して、自分の価値や役割に気づき、自我同一性（アイデンティティ*）を確立していきます。そこで、「個性・共生・共育（ともいく）」を理念として掲げ、「ふれあう」ことの大切さを提唱した「ふれあい教育」は、かながわの教育ビジョンの中でも、継承していくべき不易なものといえます。

自己肯定感をもてず、人間関係が上手く築けないことから生まれる様々な課題を解決していくためには、これまでより一歩先に進んで、さらに深く人や社会とかかわり合うような経験をし、それを学習として積み重ねていくことが、たいへん重要となります。

このような経験を通して、自らの力が人や社会に役立つ手応えを感じ、共に築いた成果を分かち合い、「心ふれあう」喜びを十分に味わうことが大切です。

また、様々なかかわりの中から、多少の困難があっても歩み寄り理解し合えるような、思いやりとたくましさを身に付けていくことも求められているのです。



(3) よりよく生きるための「行動の知」を

「ふれあい教育」では、それまでの教育が、教科を中心とした知識や技能などの「科学の知*」（競争の原理）の習得に偏っていたとの反省から、家庭や学校、地域での様々な体験を通じて、子ども自身が実感を伴って獲得する「臨床の知*」（共生の原理）の重要性が指摘されました。

今後、まわりの人や社会とかかわりながら、自分づくりを進めるには、学習や体験によって蓄えられた知を、より一層、人や社会との間で双方向的に機能させ、自らがよりよく生きるための行動を支えるような発信や創造する知へと再構築することが重要になります。

私たちは、この知を「行動の知」と呼び、学ぶことや生きることへの意欲、人への信頼や社会への関心などを基盤に、課題解決に向けて方策などを思考する力、さらにコミュニケーション能力や企画構想力、表現力などの発信にかかわる力が有機的にはたらき合って成り立つものと考えました。

教育ビジョンでは、学びとったものを生かして、自分づくりを進めるとともに、人や社会と積極的にかかわり合いながら、未来を創造できる人間力の育成に向け、「行動の知」の体得をめざします。



(4) 「心ふれあう しなやかな 人づくり」へ

これからのかながわの教育は、「ふれあい教育」を一層発展させ、一人ひとりが「行動の知」を発揮しながら、さらに深く人や社会とかかわる「心ふれあう」経験を積み重ねることで、未来を拓き、創り、生きることのできる「人間力」をはぐくんでいきます。

そのためには、一人ひとりの思いや育ちを柔軟に受け止めながらも、教育ビジョンの掲げる理念に基づき、揺るぎない教育を展開することが重要であることから、柔軟さと揺るぎなさを併せ持つ「しなやかな人づくり」を進めていきたいと思えます。

こうした教育を通して、次代を担う子どもたちには、積極的に人や社会とかかわり、「思いやる心とたくましさ」をもったしなやかな人に育ててほしいという願いを込め、これからのかながわらしい教育を次のように提唱します。

心ふれあう しなやかな 人づくり

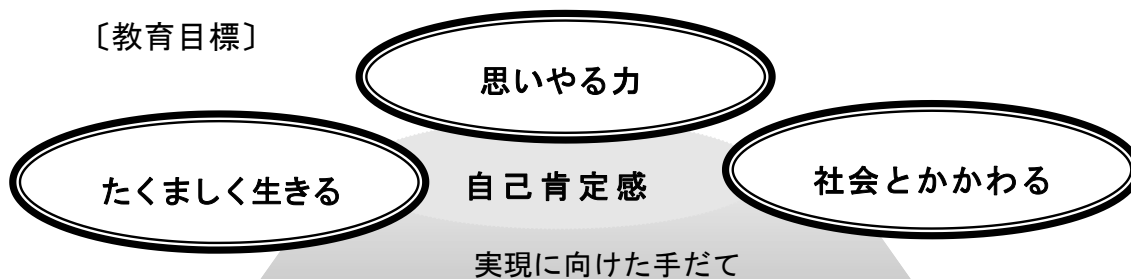


「ふれあい教育」から
「心ふれあう しなやかな 人づくり」へ

かながわ教育ビジョン

〔基本理念〕 未来を拓く・創る・生きる
人間力あふれる かながわの人づくり

〔教育目標〕



今こそ大事な
心ふれあう経験
「ふれあい教育」をさらに進め、
人や社会と深くかかわり、「心ふれあう」喜びを十分に味わう

よりよく生きるための
「行動の知」を
教科の学習や様々な体験を生かし、
よりよく生きるために行動できる力を身に付ける

『心ふれあう しなやかな 人づくり』

- 一人ひとりを大切にする柔軟な対応と、教育ビジョンに基づく揺るぎない教育の展開
- 人々や社会とかかわり、「思いやる心とたくましさ」をもった人の成長に向けた願い

〔次代を担う人づくりをめぐる状況〕

- ・ 少子高齢化の進行
- ・ 国際化と情報化の進展
- ・ 産業・就業構造の変化
- ・ 社会性や規範意識の低下への危惧
- ・ 学力や学習意欲の向上の推進
- ・ 不登校、いじめ問題などの早期解決
- ・ 家庭や地域の教育力の向上

継承・発展

「ふれあい教育」の展開 - 〔基本理念〕個性・共生・共育（ともいく）

- 家庭・地域・学校で、自然や人とのふれあいによる体験的な活動を重視
- かながわの教育における根幹としての位置づけ

〔主な成果と課題〕

- 県民一体となった教育運動が実現
- ふれあうことから学ぶ大切さを実感
- 就学前・小・中・高校などの成長に応じた、つながりのある学習の展開が不十分

県民をあげての「騒然たる教育論議」

〔昭和50年代の教育をとりまく課題〕

- ・ 受験競争の過熱
- ・ 知識偏重的な教育への批判
- ・ 家庭内・校内暴力の増加 等